

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593156

研究課題名(和文) インタープロフェッショナルワークに従事する専門職の自己評価尺度の開発

研究課題名(英文) Developing a self-rated interprofessional work competency scale

研究代表者

大塚 真理子(Otsuka, Mariko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：90168998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、病院、高齢者施設の専門職および地域ケアを担う専門職を対象に調査を行い、保健医療福祉専門職のIPWコンピテンシー自己評価尺度を開発することである。

病院、老人保健施設、特別養護老人ホーム、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所等合計3553名に調査を実施した。分析の結果、作成した尺度は24項目から17項目に修正され、再現性が確認された。これをIPWコンピテンシー自己評価尺度大塚モデル病院用17項目(OIPCS-H17)と命名した。しかし、施設、在宅支援系では異なる傾向が示されており、同じ尺度を用いることへの妥当性について検討が必要である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to develop a self-rated interprofessional work (IPW) competency scale for health, medical and welfare professionals engaged in cooperation within the hospitals, elderly care facilities and communities.

Survey were conducted in seven hospitals and nine settings which include in elderly health care facilities, assisted nursing homes, home visit nursing care stations, home care support offices. A questionnaire to evaluate IPW-related behaviors was developed and conducted on 3553 participants. As the result the 24 items questionnaire were revised in 17 items, and its reproducibility was confirmed. The questionnaire was named Otsuka Interprofessional work Competency Scale-Hospital 17 (OIPCS-H17). However, a different tendency was shown in care facilities and community care settings, more research is needed to verify validity of the scale utilization for these. We continue the research about application of clinically utilization.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：IPE/IPW Interprofessional Work コンピテンシー 保健医療福祉専門職 多職種連携協働
相互理解 IPWコンピテンシー自己評価尺度 チーム医療

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省は、医療安全と効率化のためにチーム医療が必須の課題と位置付け、2009年8月からチーム医療の推進に関する検討を行っている。そのなかで、患者・家族とともにより質の高い医療を実現するためには、1人1人の医療スタッフの専門性を高め、その専門性に委ねつつも、チーム医療を通して再統合していく、といった発想の転換が必要であると述べられている。このようなチーム医療のあり方については、英国を中心に発展しつつあり、WHOも推進している(2010) IPE/IPW が最適なイノベーションとなりうる。IPW(Interprofessional Work)は、「複数の領域の専門者が、それぞれの技術と知識を提供しあい、相互に作用しつつ、共通の目標の達成を患者・利用者とともに目指す協働した活動」(埼玉県立大学 2009)と定義され、職種間のコミュニケーションや関係性を重要視する考え方として定着し始めた。そのため、教育が IPE (Interprofessional Education) である。

IPW の研究では Partnership working や Leadership、Facilitaion、Management など実践現場の IPW を構造的にとらえた報告 (J.Glasby and H.Dickinson 2008) や Interprofessional competencies に関する研究 (Gerri Lamb 2010)、IPW を促進する現任教育の研究 (E.Anderson 2009) などが行われるようになってきている。本邦でもこのような IPW の研究が必要となっている。特に、広く保健医療福祉分野の専門職が共通して使用できる連携・協働の実践力を自己評価するための評価尺度の開発は、実践現場の IPW を構成的に理解することに役立てることができ、専門職の教育・研修に役立てることができる。IPW に必要なコンピテンシーについては、Barr (1998) のよる 3 つのタイプ分類や、Canadian Interprofessional Health Collaborative、2007) などがあり、本邦の保健医療福祉の実情に合ったものが必要となっている。

2. 研究目的

本研究の目的は、病院のチーム医療を担う専門職、高齢者施設のチームアプローチを担う専門職および地域ケアにおける多機関間連携に携わる専門職を対象に調査を行い、本邦における保健医療福祉系専門職の連携・協働自己評価尺度(IPW コンピテンシー自己評価尺度)を開発することである。

3. 研究の方法

(1) 第一段階の調査：筆者らの先行研究で明らかになったインタープロフェッショナルワーク(以下、IPW)に必要なコンピテンシーリストをもとに 37 質問項目を作成して実施した調査結果の分析から、IPW コンピテンシー自己評価尺度 24 項目の自記式質問紙、回答は 4 件法(「している」「時々している」

「あまりしていない」「していない」)を作成し、6 病院全職員 2,231 人の調査を平成 23 年 12 月から平成 24 年 2 月に実施した。

(2) 第二段階の調査：関東圏の 6 病院全職員調査結果をもとに、6 因子 24 項目でできている IPW コンピテンシー自己評価尺度から抽出された 17 項目について、A 県内の 1 病院全職員 567 人を対象に、平成 25 年 9 月から 10 月に調査を実施して検証し、病院版 IPW 自己評価尺度の完成を目指した。

(3) 第三段階の調査：病院勤務以外の専門職への適応可能性を検討するため、高齢者施設や地域で多職種連携を行っているケアマネージャー、ヘルパー、訪問看護師などを対象とした調査を行った。

4. 研究成果

(1) 第一段階調査(関東圏 6 病院全職員調査)の結果

回収数 1,530 人(回収率 51.2%)、有効回答数 1,140 人(51.1%)であった。分析は SPSSVer.20forWindows を使用した。職種は看護師 773 人(50.5%)、事務職 233 人(15.2%)、医師 97 人(6.3%)、看護助手 62 人(4.1%)、臨床検査技師 60 人(3.9%)、理学療法士 42 人(2.7%)、薬剤師 31 人(2.0%)、助産師 25 人(1.6%)、社会福祉士 19 人(1.2%)、栄養士 18 人(1.2%)、作業療法士 15 人(1.0%)であった。平均年齢 37.8±11.1 歳(18~73 歳)であり、現在の職種の平均経験年数は 11.9±7.3 年(0.1~43.8 年)であった。

24 項目の平均値は、「私は他の専門職を対等な仲間として尊重する」3.47、「私は他の専門職をねぎらう」3.15、「私は他の専門職に患者の情報を伝える」3.15 の順に高く、「私は患者・家族を交えたケア会議の開催を必要に応じて提案する」1.9、「私は他の専門職同士のやりとりで議論の内容が整理できるような方法を提案する」1.9 が低かった。これら天井効果と床効果がみられた 7 項目を除外して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、2 因子が抽出された。累積寄与率は、第一因子が 54.6%、第二因子までで 61.2%であり、各項目の因子負荷量は、0.94~0.45 であった。第一因子を「チーム活動の実践」第二因子を「相互理解」と命名した。Cronbach の信頼係数 α は、全体では 0.952、第一因子は 0.94、第二因子は 0.90 であり、因子同士の相関は 0.724 であった。すなわち、第一段階の調査から、IPW コンピテンシー自己評価尺度は、「チーム活動の実践」11 項目、「相互理解」6 項目の構造で成り立つ合計 17 項目が抽出された。

(2) 第二段階調査(病院版 IPW 自己評価尺度の検証)の結果

回収数 362 人(回収率 63.8%)、有効回答数 321 人(56.6%)であった。病院の調査結果は平成 23 年度調査の 6 病院の結果と合わ

せて、1,761 件（有効回答率 62.9%）を分析した。天井効果、床効果が見られた 7 項目を除外し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、2 因子が抽出され、1 項目以外は 6 病院調査の結果に一致した。また、6 病院調査で抽出された 17 項目を用いた因子分析では、因子構造は完全に一致しており、病院に勤務する職員を対象とした IPW コンピテンシー自己評価尺度の因子構造の再現性を確認することができた。

地域中核病院で患者の援助活動を行っている職員の IPW コンピテンシーを自己評価によって測定する尺度として、「チーム活動の実践」11 項目、「相互理解」6 項目の構造で成り立つ 17 項目の自己評価尺度は、信頼性の高い尺度であり、これを「IPW コンピテンシー自己評価尺度大塚モデル病院用 17 項目（OIPCS-H17）」とした。先行研究で作成した 6 因子 24 項目の IPW 自己評価尺度については、IPW コンピテンシー自己評価尺度 24 項目改訂版（OIPCS-R24）とした。

（3）第三段階調査（介護施設職員および在宅支援職員調査）の結果

老人保健施設および特別養護老人ホームなど 7 施設の全職員 568 名、クリニック、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所など 9 か所と介護事業所管理者対象の研修参加者など在宅支援系職員 212 人、合計 780 人である。調査回収数は 488 件（回収率 62.6%）、そのうち研究同意の記載がないもの、3 つ以上の設問が無回答のものを除いた 422 件（施設 325 件、在宅 97 件）、有効回答率 54.12% を分析対象とした。分析は SPSSVer.22forWindows を使用した。介護施設では、介護職 207 人、看護師 33 人、事務職 18 人、相談ソーシャルワーカー 17 人、栄養士 6 人、ケアマネジャー 4 人、医師 3 人などさまざまな職種から回答を得た。平均年齢 40.5 歳、現在の職種での経験年数 8.4 年であった。在宅支援系職員は、看護師 35 人、介護職 25 人、医師 5 人、薬剤師 5 人、ケアマネジャー 9 人、薬剤師 5 人、相談ソーシャルワーカー 4 人などであり、平均年齢 45.9 歳、平均経験年数 10.4 年であった。

（4）3 つの調査の比較検討

24 項目の IPW 自己評価尺度を用いた、第一・二段階、第三段階の調査結果について、天井効果および床効果があった項目を比較したところ、表 1 のようであった。病院群では 7 項目、施設職員は 8 項目、在宅支援職員は 16 項目に天井効果および床効果が見られた。天井効果および床効果で 24 項目から 17 項目に削除された項目について再検討する必要がある。さらに、天井効果や床効果の項目は施設や在宅で異なっており、この結果は職場形態によって多職種連携実践のあり方が異なっていることを示唆しており、同じ評価尺度を用いることへの妥当性

について検討が必要である。

表 1 天井効果・床効果があった項目の比較

項目	病院群	施設群	在宅群
1. 患者が必要なケアを受けられるように調整する			
2. 他の専門職と援助方針を決定するために議論する			
3. 患者に対する援助方針を他の専門職に伝える			
4. ケア会議の場を必要に応じて提案する			
5. 他の専門職に患者の情報を伝える			
6. 他の専門職から患者の情報を聞く			
7. 他の専門職からの相談に応じる			
8. 他の専門職に相談する			
9. 多職種で行った援助活動の評価を行う			
13. 議論の内容を整理できるような方法を提案する			
14. 相手が言いたいことを確認する			
17. 他の専門職の状況を知ろうとする			
18. 他の専門職の役割を理解しようとする			
19. 他の専門職に自分の状況を伝える			
20. 他の専門職を対等な仲間として尊重する			
21. 他の専門職との関わりを振り返る			
22. 他の専門職をねぎらう			
23. 援助の満足感や達成感を他の専門職と共有する			

天井効果項目を、床効果項目を で示す。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

大塚真理子、看護管理者のための IPE/IPW の実践力とチーム医療での効果的実践のコツ、看護部通信、11、日総研出版、2013、pp.2~7、査読無

大塚真理子、IPW を実現するために求められる専門職のコンピテンシー、主任&中堅+こころサポート、21 巻 1 号 日総研出版、2011、pp.39~42、査読無

〔学会発表〕(計 11 件)

丸山優、國澤尚子、長谷川真美、畔上光代、大塚真理子、職位による専門職実践能力の相違 - 職種ごとの中間管理職者とスタッフの比較から - 、日本保健医療福祉連携教育学会第 6 回学術集会、2013 年 10 月 26 日、仙台市、pp. 83

畔上光代、大塚真理子、丸山優、國澤尚子、長谷川真美、新井利民、安田哲也、地域中核病院の看護スタッフの経験年数と IPW コンピテンシーの特徴、日本保健医療福祉連携教育学会第 6 回学術集会、2013 年 10 月 26 日、仙台市、pp.77

畔上光代、大塚真理子、丸山優、國澤尚子、長谷川真美、新井利民、安田哲也、地域中核病院の看護職者の IPW コンピテンシーの特徴 - 24 項目の IPW 自己評価における調査から、第 5 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2012 年 10 月 7 日、神戸市、pp.75

大塚真理子、國澤尚子、丸山優、長谷川真美、新井利民、Characteristics of Interprofessional Work Competencies of Staff at Cre Regional Hospitals、All Together Better Health、2012 年 10 月 6 日、pp.419

國澤尚子、大塚真理子、丸山優、長谷川真美、新井利民、Development of an Interprofessional Work Competency Scale(2)、All Together Better Health、2012 年 10 月 6 日、神戸市、pp.415

長谷川真美、丸山優、新井利民、大塚真理子、Characteristics of Interprofessional Work Competencies of Management Staff at Cre Regional Hospital、All Together Better Health、2012 年 10 月 6 日、神戸市、pp.417

丸山優、大塚真理子、國澤尚子、長谷川真美、新井利民、Comparison of Interprofessional Work Competences of Staff at Core Regional Hospitals、All Together Better Health、2012 年 10 月 6 日、神戸市、pp.418

丸山優、國澤尚子、新井利民、長谷川真美、大塚真理子、病院で働く専門職が連携対象者と認識している職種、第 4 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2011 年 11 月 5 日、横須賀市、pp.76

大塚真理子、國澤尚子、丸山優、長谷川真美、新井利民、病院の中堅多職種が有する IPW のコンピテンシーの特徴、第 4 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2011 年 11 月 5 日、横須賀市、pp.77

長谷川真美、大塚真理子、國澤尚子、丸山優、新井利民、病院で働く専門職管理者の IPW コンピテンシーの特徴、第 4 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2011 年 11 月 5 日、横須賀市、pp.78

國澤尚子、丸山優、長谷川真美、新井利

民、大塚真理子、IPW コンピテンシー尺度の開発(1)、第 4 回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、2011 年 11 月 5 日、横須賀市、pp.79

〔図書〕(計 1 件)

大塚真理子、長谷川真美、第 4 章「食べる」こと支える専門職連携実践：諏訪さゆり、中村丁次編著、「食べる」ことを支えるケアと IPW、建帛社、2012、P27~39

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚 真理子 (MARIKO Otsuka)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号：90168998

(2) 研究分担者

丸山 優 (YU Maruyama)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：30381429

長谷川 真美 (NAOMI Hasegawa)
東都医療大学・ヒューマンケア学部・教授
研究者番号：00164822

新井 利民 (TOSHITAMI Arai)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：00336497

(3) 連携研究者

國澤 尚子 (NAOKO Kunisawa)
医療生協さいたま・地域社会と健康研究所・副所長兼主任研究員
研究者番号：20310625

(平成 23・24 年度まで研究分担者、25 年度連携研究者)

畔上 光代 (MITSUYO Azegami)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号：40644472